Kan-un Yokota (Kyozo Yokota)

「破方為円、削繁為簡」

2009年　70×136cm

素材：画仙紙・油煙墨

作者の言葉

書

横田閑雲（本名：恭三）

東洋において、人は文字に対していつごろから美を見出し始めたのであろう。今ここに松丸道雄氏の論述がある。氏は、甲骨文に秀抜な作品が存する理由について、2つに分析している。第1点は、文字は永い歴史の上で洗練されてきたことに由来するとし、前2000年紀の初め頃を漢字形成期と把えれば、甲骨文字に到る300～400年間に、美的洗練が行われたものであるとみる。第2点は、甲骨文字の契刻を実際に行った人々の錬磨・鍛錬に由来するものでなければならないと述べ、甲骨文中に、「法刻（お手本）」とそれを見ながら練習した「習刻（手習い）」とが混在することから、殷代においても後代の「習字」と同様、手本をもとに初心者が習刻をくり返すことによって修練したものであることを指摘されている。（「殷代の学書について―甲骨文字における“習刻”と“法刻”―」『書学書道史研究』第10号）

これを踏まえれば、人は文字の誕生とともに少なからずその美醜に対して一定の感覚を持ち、その文字は熟練した無名の書き手の創意工夫によって変化発展してきたものと考えられる。

◇

掲載の作品は、戦国から秦代によく使われた篆書体を用いて、全紙横サイズの画仙紙に「破方為円、削繁為簡（方を破りて円と為し、繁を削りて簡と為す）」と書いたものである。明・万暦時に状元（進士の主席）となり、書画家として名を馳せた董其昌の『画禅室随筆』中にみえる語句を題材にした。

古人の優れた用筆法に学びつつも、“外に見える角ばった所を内にまとめて円潤にし、繁雑さを取り除いて簡素に換える”ような創意工夫ができたなら、何と爽快なことではないか。